名簿No. 1

神漢連 九詩期会 詩箋 【七言絶句】

平仄式	仄起式
作詩日	平成二九年一月九日
名前	牛山 知彦

詩題	起句	承句	転句	結句
訪台湾故宮博物院（東韻）	秋○	幾○	超○	年●
	半●	多○	凡○	歳●
	客●	秘●	人○	四●
	身○	寶●	事●	千○
	訪●	凝●	正●	在○
	故●	双○	神○	胸●
	宮◎	瞳◎	品●	中◎

読み下し文

台湾故宮博物院を訪ねる

秋半ば　客身　故宮を訪ね
幾多の秘宝に双瞳を凝らす
超凡たる人事　正に神品
年歳四千　胸中に在り

語註・典故・作詩メモ

客身・・旅行中の身
超凡・・凡人の域をとびぬけていること
人事・・人としてなしうる事柄
神品・・人間わざでは出来ないような非常に優れた品
年歳・・とし

その他のメモ

名簿No. 2

神漢連　九詩期会　詩箋　【七言絶句】

詩題	起句	承句	転句	結句
仄起式 丁酉年頭書懐	萬●	申○	滄○	庶●
	事●	申○	桑○	幾●
	夭○	世●	前○	青○
	夭○	上●	路●	霄○
	百●	太●	風○	放●
（陽韻）	慮●	平○	雲○	瑞●
	忘◎	光◎	険●	祥◎

作詩日　平成二十九年一月

名前　宇野次郎

読み下し文

丁酉年頭書懐

万事　夭夭として　百慮　忘る
申申として　世上　太平の　光あり
滄桑たる前路　風雲　険あり
こいねがわくは　青霄　瑞祥を放んことを

メモ　作詩・故典・註語

今年の正月は　晴天で　暖かい　穏やかな　一日だった。
しかし　米国　トランプ大統領の就任を　一月に控え
政治・経済共に　多難な一年が予想される。
夭夭・申申は　心がおだやか・ゆっくりくつろぐことで
「論語」「述而編」から引用した。
滄桑ー世の中が　大変　変わること
青霄ーあおぞら

その他のメモ

名簿 No. 3

神漢連　九詩期会　詩箋　【七言絶句】

詩題	起句	承句	転句	結句
爲研以德篠田博士（先韻）	農○	庶●	酵●	人○
	藝●	糖○	菌○	造●
	化●	分○	産●	血●
	學○	解●	物●	漿○
	一○	細●	无○	明●
	系●	微○	聲○	又●
	賢○	研○	有●	痊○

作詩日　平成29年1月9日

名前　梅村　郁郎

文　し　下　み　読

徳を以て研を爲す篠田博士

農芸化学一系の賢

庶糖分解せし細微の研

酵菌の産物に天声有り

人造血漿明にして痊なる

語註・典故・作詩メモ

・一系……家系

・人造血漿……血漿増量剤で、血栓防止、人工臓器への人血代用として用いられている。

その他のメモ

篠田晃博士……東大農学部坂口謹一郎先生に師事。砂糖シラップの中の粘質物が微生物の作用でできることに注目し、その工業化に貢献した。

名簿No. 4

神漢連 九詩期会 詩箋 【七言絶句】

平仄式	作詩日	名前
仄起式	二八・十二・二	岡嶋 宣昭

詩題	起句	承句	転句	結句
厳冬苦寒	油○	侵○	忍●	著●
	凍●	窓○	寒○	盡●
	柴○	霰●	木●	皮○
	荊○	雪●	椀●	裘○
	膚○	厲●	一●	擁●
（虞韻）	粟●	風○	杯○	火●
	起●	俱◎	酒●	爐◎

厳冬 寒に苦しむ

油凍る柴荊 膚 粟起り

窓を侵す霰雪 厲風俱なり

寒を忍ぶ 木椀一杯の酒

皮裘 著尽して 火爐を擁す

語註・典故・作詩メモ

起句 踏み落とし

No. 11

平起式 【真】 題 名前 賀蕭陸

題 歳旦即事

禅	房	山	郭	孟	春
凛	冽	寒	歳	万	象
今	古	不	更	修	誦
朝	来	賽	客	笑	聲

晨	禅	房	山	郭	孟
春	晨	凛	冽	だる	寒
歳	万	象	新	今	古
更	らず	誦	経	を	修
せば	朝	来	の	賽	客
笑	声	頻	りなり		

読み下し文

歳旦即事

禅房山郭孟春の晨
凛冽たる寒歳万象新む
今古更らず誦経を修せば
朝来の賽客笑声頻りなり

（平成二十九・一・六作詩）

○禅房山郭…神奈川県、丹沢山中にある筆者の住職する禅寺
○誦経…経文を読誦（声をあげて読む）すること
○賽客…参拝者

名簿No. 14

神漢連 九詩期会 詩箋 【七言絶句】

平起式

詩題	起句	承句	転句	結句
元日	満●天○瑞●気●太●平○春◎	閑○酌●屠○蘇○歳●此●新◎	莫●笑●老●翁○其○夢●大●	履○端○願●意●一●驚○神◎
（真韻）				

文読み下し

満天の瑞気 太平の春
閑酌す屠蘇 歳此に新まる
笑う莫れ老翁の 其の夢大いなるを
履端の願意 一に神を驚かしむ

作詩日 平成二十九年壱月

名前 松本祐輔

モメ詩作・故典・註語

去年の元日に比して、今年は健康が回復し、元日は天気も気分も穏やかに迎えることができた。

履端＝正月元日

その他のメモ

名簿No. 15

神漢連 九詩期会 詩箋 【七言絶句】

詩題	起句	承句	転句	結句
新年所懐	川 ○	天 ○	白 ●	新 ○
	流 ○	地 ●	髪 ●	春 ○
	映 ●	深 ○	霜 ○	猶 ●
	出 ●	閑 ○	髭 ○	未 ●
	麗 ●	独 ●	吾 ○	断 ●
（陽韻）	初 ○	酔 ●	欲 ●	剛 ○
	陽 ◎	郷 ◎	老 ●	腸 ◎

平仄式	平起式
作詩日	平成二九年正月三日
名前	三浦 昭二

読み下し文

新年所懐

川流映し出だす初陽の麗
天地深閑として独り酔郷
白髪霜髭吾老いんと欲す
新春猶未だ剛腸を断たず

語註・典故・作詩メモ

今年の正月は、元旦から穏やかに晴れ、青空が空一面に広がっていて気持ち良く過ごせた。
子や孫たちが、それぞれ帰っていった翌日、正月三日の早朝に、近くの鶴見川干潟に日の出を見に行った、昨夜の独り酒が残っていたものの、シーンと静まり返った川面を照らして赤々と昇る太陽に、また一つ歳を取ったという感傷も吹き飛び、大きな勇気をもらった。

その他のメモ

白髪霜髭：髪と髭が白くなっているさま
剛腸：気性が強くて信念を曲げないこと